

特集

最後の卒業式 在校生8名が笑顔と涙で 和寒高校60年の歴史に幕

昭和25年に北海道永山農業高等学校和寒分校として開校してから60年間の歩みが続けてきた和寒高校が3月末で閉校となりました。これまでの歴史や最後の和寒高校卒業式の様子などをご紹介します。

60年間の歴史に幕

昭和25年、北海道永山農業高等学校（現旭川農業高校）和寒分校（定時課程夜間農業科）として開校したが、和寒高校の前身であり、昭和27年に北海道和寒高等学校として独立しました。

昭和42年には北海道へ移管され、今日まで60年間の歴史を歩み続けてきましたが、道立高校の再編に伴い、平成22年3月で閉校となりました。



S33年当時の校舎

最後の卒業生

3月1日（月）、和寒高校において最後の卒業式が行われました。



S39年改築時の校舎

和寒高校最後の卒業生は、伊藤嘉伸さん、大場康人さん、桑山亮太さん、竹本将大さん、原高弘さん、三好涉太さん、大盛茜さん、矢萩千翔さんの8名。

卒業生は、大きな体育館に1列に整列し、壇上で小越校長先生より最後の卒業証書を受け取りました。

式では、送辞として教職員代表の猪狩先生が「これからは厳しくつらい道となるが、自分に自身を持って、力を信じて、誠実に着実にそれぞれの道を行ってほしい」と言葉を送りました。また、和寒高校の卒業式では恒例となっている一人ひとりの思い出なども紹介され、会場には涙ぐむ場面も多く見られました。



答辞では、最後の生徒会長となった三好涉太さんが、これまでの学校生活を振り返りながら「このクラスみんなとともに過ごした学校生活はいい思い出となった。みんなで助け合い最後はいつも笑うことができた。支えてくれた皆さんに感謝したい」と感謝の言葉を述べました。その後、生徒たちは全員で中央のくす球を割ると、「和魂よ永遠に」に書かれた垂れ幕が掲げられ、会場から大きな拍手が送られました。ホームルームに戻った生徒たちは、担任の根府先生と握手をしながら、お別れの言葉を一人ひとり述べた。3年間の学校生活を終えました。



和寒高校の伝統
開校以来60年間「誠実・勤労・剛健」を校訓にし、和寒高校魂が次の世代へと引き継がれてきました。これまで3千679名の卒業生を送り、農業後継者や地域経済界で活躍している人も数多くあり、まさに地域に根ざした学校でありました。昭和30年代後半には定時制の農業クラブが全国大会に出場し、陸上部



は、マラソンや駅伝で和寒高校の名を上げていきました。

昭和40年代半ばからは、部活動がさらに活発化し、卓球、野球、バドミントン、スキー、剣道、庭球、演劇と部活動の黄金期を迎え、全道・全国大会で活躍しようと、生徒たちが切磋琢磨した時代がありました。そして、昭和53年には全国高校スキー大会の個人の部で男女アベック優勝を成し遂げ、昭和

62年、63年には全国高校スキー大会男子リレーで全国2連覇を達成し、その名が全国に知られるようになりました。昭和56年には、全日制278名、定時制81名と過去最高の在籍数となりましたが、平成

元年に39年間続いた定時制課程が閉課となり、平成7年には全日制1問口の高校となり、生徒数も徐々に減少していくこととなりました。長年培われてきた伝統は、60年間という長い歴史を刻み続けてきましたが、平成22年3月でその歴史に幕が下りました。

閉校記念式典

3月6日(土)には、閉校記念式典が行われ、教育委員会関係者をはじめ同窓生の方々や町内関係者ら約350名が参加し、閉校を惜しみました。

式辞では、小越校長先生が「60年の歳月が流れる中、地域とともに歩む学校づくりを目標に、たくましく心豊かな生徒の育成に全力で取り組んできました。いつまでも皆さんの



心に和寒高校が在り続けてくれるでしょう」と述べました。

また、閉校記念事業協賛会の会長である合田鉄雄さんは「職員や同窓生の皆さんにご協力をいただき、最後の卒業生8名を送り出すことができました。これまでのご協力に感謝したい」と感謝の言葉を述べました。

その後、会場を恵み野ホールに移し行われた、惜別の会では、徐々に再会した恩師や友人と和やかに楽しいひとときを過ごしました。

閉校を記念して作成されたDVDが上映されると、会場からは当時を懐かしむ声が多く聞かれました。

和寒高校の歴史と伝統は、60年間の歴史に幕を閉じることとなりますが、同窓生の方々をはじめ多くの関係者の皆さんの記憶に残っていくものとなりました。

